

新出の富田溪仙書簡

(内貴清兵衛あて 明治四一年～大正四年)

——画家とパトロンとの交遊——

古^{*} 川 智 次

はじめに

人との出会いは、人生を決定することがある。

日本画家富田溪仙の画業を語る上で欠かせない人物といえば、画家としての出発点で師事した四条派の画家都路華香、無名の溪仙を異色の画家として俳人たちに紹介した俳人河東碧梧桐、日本美術院の再興に際して溪仙を勧誘し同

志的交遊関係を結んだ横山大観、詩画合作の作品を残した駐日フランス大使の象徴派詩人ポール・クロードルなどがあげられるだろう。

さらに忘れてならないのは、赤貧の無名画家を支援して一人前の画家に育てた京都の老舗呉服商内貴清兵衛という人物の存在である。

(一) 書簡発見の経緯と概要

ここに紹介する富田溪仙の内貴清兵衛あて書簡は、京都市在住の大橋晶子氏の所蔵である。大橋氏は内貴清兵衛の妻ナオ（京都の半襟商大橋孝七の次女）の弟大橋孝吉の孫にあたる。内貴清兵衛の死後、溪仙書簡が一括して直系ではない大橋孝吉に託されたのは、祖父が画家だったからだろうと大橋氏は推測されている。祖父の遺品の、パリ留学時に使用した旅行鞆の中から溪仙の書簡が見つかったのは八年前のこと、大橋氏はそれを整理をされた後、溪仙研究に資することを願って昨年四月、かつて本誌に「溪仙の模索時代」と題する拙論を発表したことがある筆者に連絡されたのがご縁で、本書簡を拝借し調査する機会を得た。

溪仙書簡の内訳は以下のとおりである。

溪仙から内貴清兵衛（あるいは舟屋）に宛てた封書は九六通（中身なし八通、封筒なし八通を含む）、葉書六八通。

全て老舗呉服問屋「錢清」の住所「京都東洞院御池上ル（船屋町）」宛で、中には溪仙の妻などに持参させたものもある。

本書簡には、内貴清兵衛あて以外の書簡も含まれている。内貴清兵衛の実弟内貴富三郎あて封書五通、葉書三通。俳人河東碧梧桐から内貴清兵衛あて葉書一通、溪仙の師都路華香から内貴富三郎あて葉書一通、その他の葉書五通、計二〇七通である。内貴清兵衛あて以外の書簡が含まれている理由については後述する。

これらの書簡には年月日不明のものが若干あるが、明治四一年（一九〇八）から大正四年（一九一五）の間に差し出されたものと見て間違いない。この間は、溪仙が模索時代を経てようやく画壇に登場するまでに相当し、台湾・南清行（明治四二年）、東北・北海道・北陸行（同四四年）、横山大観らが再興した日本美術院（再興院展）への参加（大正四年）と、溪仙の生涯でもっとも波瀾に富んだ時代であり、それは内貴清兵衛が溪仙のパトロンだった時代と重なる。

溪仙と内貴清兵衛との交遊を伝えるものは、溪仙の死の直後に内貴清兵衛が語った回想談筆記しかなかった^①。だから、新出の本書簡は一方の画家の証言として、筆者には格別興味深いものがある。今後の溪仙研究にこの書簡が活用されることを期待したい。

筆者は定年後、溪仙研究から遠ざかっていたので最初は躊躇した。しかし本書簡を一読すると、いくつか未知の事実もあり、この機会に、旧稿を補足する意味もあると考えて小論を起稿することにした。

(二) 溪仙と内貴清兵衛との出会い

富田溪仙は明治一二年（一八七九）、現在の福岡市博多区に生まれる。三〇年（一八九七）、数えの一九歳で上洛、四条派の画家都路華香の内弟子となった。その後独立、独学と放浪の時代を経て、大正元年（一九一二）の文展（文部省美術展）に初入選、翌二年も入選、三年の文展では落選したが、横山大観らが再興した再興院展（再興日本美術院展）に入選、翌四年には日本美術院の同人に推挙され、以後は再興院展を舞台に順風満帆、異彩として活躍したことで知られている。昭和十一年（一九三六）、満五六歳で死去。

一方の内貴清兵衛は、明治十一年（一八七八）に京都の老舗呉服問屋「錢清」の長男に生まれた。内貴の祖父（養嗣子）には長い間子供ができず、後継として養子（先代）を迎えたが、その後実子（内貴の父甚三郎）が誕生したので、ゆくゆくは甚三郎が家督を相続する筈だった。しかし明治三二年（一八九八）、甚三郎が京都の初代市長に選出されて政界に進出したため、長男の内貴清兵衛が若くして錢清の家督を相続、幼名の清之助から祖父の名を襲名して清兵衛と改名した。戦前の内貴清兵衛は、溪仙をはじめとする美術家のパトロンとして、また古美術のコレクターとして知られた。昭和三〇年（一九五五）、満七六歳で死去。

内貴は溪仙との出会いについて、「明治三十六年都路華香さんの紹介で知りあつた。……うちの書生に富田と云

ふ男が居るが、見処のある奴やから面倒見てやつてんか。……数日後ひよつこりやつて来た。」と語っている。^②

明治三十六年（一九〇三）は錢清の先代が没した年で、内貴は数えの二六歳、溪仙二五歳である。その後、溪仙は独立の意志をかためて都路家を辞し、一度博多に帰省、再上洛するのは三十八年（一九〇五）五月下旬である。内貴の錢清とは目と鼻の先の「東洞院通姉小路上ル」の地に借間したのは、内貴に接近したい気持ちがあったからだろう。

引越して一ヶ月後、内貴から呼び出しがある。溪仙の日誌に、「夕景予を招きたる使いありぬ 欧州視察したる某氏（注・内貴清兵衛のこと）なりき 予は九州より帰京してまだ某の君に会せず 某の君は写真亦是近來流行の絵葉書を室内にちらしぬ 某の君欧州芸術と日本の現今の芸術と対照談発、として瞬間の口の閑さへなかりき……」（六月二四日）とある。内貴は前年、明治三十七年（一九〇四）のセントルイス博覧会において京都サロンが設置された折りに渡米した経験があり、その時の見聞を開陳したのである。

この日誌（溪仙が日常携帯し、雑多なことを記した「雑記帳」とは別冊で、『富田溪仙資料目録』（福岡県立美術館編平成六年）未収録）には、七月一二日までの記述中に内貴清兵衛のことがしばしば出てくる。内貴に対する呼称が「某氏」「某の君」「舟屋氏」「内貴」と変化し、ほぼ同年齢ということもあり、短期間で二人が急接近したことを語っている。

「内貴氏突と来る 喜び迎て又々気焰の熱火燃るが如し 氷面^マ為に破るが如き思をなす 彼は二の口には必ず実利的論評を下して絵画を見る 然れ共進歩的直入的の觀察を以てり……」（七月一日）と、内貴の印象を記している。

内貴の商人的な合理性と激しい気性、独特の美的感性を、溪仙はこの時点で感じ取ったに違いない。無名の貧乏画家と若き大店の主人との交遊、画家とパトロンとの関係はこうして始まった。

本書簡には、いろいろな観点から見て興味深い内容が含まれているが、紙数に限りがあるので、筆者が注目した書簡を適宜引用して、以下に解説を試みることにしたい。

(三) 洋風画から伝統絵画への回帰

内貴の回想談には、二人はしばしば議論し喧嘩をしたとある。

溪仙の明治四〇年（一九〇七）の紀州行の喧嘩の原因は、当時の京都画壇の洋風傾向に影響された溪仙の洋風画を内貴が批判し、日本の伝統絵画を学んで新機軸を発現することを勧めたことにある。紀州からの溪仙の書簡の一部を紹介して、「溪仙の絵は此の紀州旅行の心機一転を機会に急に変わつて来た」^③と、内貴は語っている。自分の主張に従って溪仙が伝統絵画へ回帰したと言いたかつたのだろう（実は、溪仙の伝統絵画への回帰は、この紀州行の前からすでに見られる）。

このくだりは、溪仙論では大事な要点としてとりあげられるが、問題の書簡は大橋家の書簡中にはない（紛失したのか、内貴が意図的に処分したのか、それはわからない）。

この洋風画について、台湾・南清行の途次に立ち寄った下関市観音崎の永福寺からの内貴あて書簡（明治四二年二月二五日付）で、溪仙は次のように書いている。

……彼の（雪中狐ノ山水）出品分此ノ寺院に寄附して恥すへからざるを覚へ候故 来ル五月四日は同永福寺ノ開帳ノ由なれば是非其ノ際迄に表整するとの事なれば何卒御承諾 貴兄も御同様なれば急に御送附有之度 何れ樗堂僧よりも御手紙参るへく候間宜敷……

文中の「雪中狐ノ山水」出品分」が問題の洋風画だろう。内貴が回想談で述べている落選画（明治三七年の新古美術品展）に該当し、現存する洋風の試作画「雪に狐」（仮題、「雪」あるいは「冬景色」とも題されていた）の本画と考えられる（拙稿参照）^④。

この作品を「寄附して恥すへからざるを覚へ候故……貴兄も御同様なれば」永福寺へ寄進したいという溪仙の意向が実現したとしても、永福寺は戦災にあっているから、この作品は消失した可能性が高い。

溪仙の洋風画はこの一点しか確認されていないが、後の内貴あて書簡（差出年不明、大正初め？ 持参）に、「セザンヌの画集御覧に供し候……」とあるので、西洋の新傾向絵画にも関心を向けていたことは疑いない。

(四) 台湾・南清行

溪仙の転機となった明治四二年（一九〇九）の台湾（日本統治時代）・南清行の詳細については、拙稿^⑤を参照されたい。

内貴清兵衛は「支那に行き度いと言ふので旅費の準備をしてやり、洋服も新調したりして、……護身用にピストルも一挺買込んだ^⑥」と語っている。「旅費の準備」はどのようにしたのか。

台湾・南清行に出る前の内貴あて書簡（明治四二年一月七日付持参）に、

……俗用今將に達しんとす 南禪寺ノ観音既に出来致し候 森島も渡し候 春芳堂ノ二枚折三本出来ぬ故何卒貴兄より春芳堂へ右三本至急回せ御命し被下度それか出来れば早速揮毫尻に帆かける覚悟に候 何れ其内御面倒可致候 尚南禪寺ノ観音一葉記念ノ為め御贈り申上候

とある。

この書簡から、「旅費の準備」は画会を組織して調達したことがわかる。内貴が発起人になって画会を組織し、会費をとって溪仙がその注文画を描くというやり方である。「俗用今將に達しんとす^⑦」というのは、ようやく注文画の

制作に目処がたったということ。「尚南禪寺ノ観音一葉記念ノ為め御贈り申上候」とは、画会の世話をしてくれた内貴へのお礼（あるいは世話料）だろう。二月十五日付の書簡では「貴兄ノ出来得る限りノ御準備は恐ながら宜敷願上候」と、内貴に最大限の支援を依頼している。

溪仙は三月三日、門司港から「帝國義勇艦隊第一艦櫻丸」に乗船、三月五日に台湾基隆着。「台湾二ヶ月、南清三ヶ月、都合五ヶ月」「広東省より内地陸行して湖南の瀟譚、長沙を過ぎ洞庭湖に入らん予定」だったが、「雜記帳」の日誌では、台湾滞在は一一日間、南清滞在は三四日間で、当初の予定より大幅に台湾滞在が長くなっている。南清行の旅費を調達するための画会が順調に行かなかったからである。内貴への通信は、台湾からは一四通、南清からは五通と少ない。台湾は比較的のんびりした滞在だったが、南清では緊張した旅だったことと関係するだろう。

溪仙が渡台する前年、台湾縦貫鉄道が全通し、その開通式に雑誌記者として俳人河東碧梧桐が渡台した影響で、台湾では俳句が盛んになっていたことは幸いだった。

台湾縦貫鉄道で台北、新竹、台中、彰化、台南、打狗（高雄）を往復。台湾の風物と風俗のスケッチ（帰国後の作品「相思樹の橋」や『台清漫画紀行』などにつながる）の他、南清行の旅費を調達するための画会や席画（注・集会の席上で、注文に応じて絵を描くこと）を行っている。俳句の趣味があつた溪仙は運座などに招かれ、画家としてよりもむしろ俳人として歓迎されている。そのことが縁で、後に碧梧桐との出会いにつながる。

台湾到着後、さっそく困ったことは台湾の暑さである。冬服で来た溪仙は内貴に夏服の注文を依頼している（打狗から三月一八日付）が、その後、「何とか当地で致す心組に候 御心配無之様願上候」（同 三月二八日付 葉書）と、現地にて夏服を調達する旨を伝えている。

台北からの書簡には、「骨とうの事御心配なくても宜敷 内地ものも結構支那ものも結構に候 要は神通の作是なり」（五月二三日付）とある。内貴からめばしい骨董があつたら買い取るように依頼されていたのだろう。「雜記帳」の日誌には、台南で「古物數百を求む。百五十円ほどのものなり」とあり、渡台の目的の一つに、書画骨董の買い付けもあつたと思われる。

清国の厦門に渡るのは六月一四日、香港、広東を巡り、福州に至る。

福州からの書簡（七月二日付）に、

……：広東省より湖南長沙湘潭洞庭湖岳陽樓を迂回して漢口に出でんものと致し居候処日本人広東ノ茂村にて殺害せらるゝと聞き 今や退て南清海岸を回りにて上海に向かふの心組に候 広東ハ彼ノ辰丸事件（注・排日運動の先駆けとなつた事件）又ボーイコットの為め日本人排斥甚だし（小）生も二三度ノ喧嘩をなす生命別状なし……：マ、ヨ

とあり、この先の旅の不安と覚悟を伝えている。

その後、上海、蘇州、杭州を巡っているが、最後の通信は、杭州からの七月一七日付の絵葉書で、描きかけの粗画には文字は書かれていない。

南清から帰国するまでの経緯は、内貴によればコレラ（溪仙の日記に「広東はペストの流行甚だし」とあるのでペストか？）に罹ったというがよくわからない。いずれにしても病に倒れたためで、不本意ながらの帰国となった。

（五）帰国、上洛

八月上旬、博多に帰着。八月九日付の書簡（福岡市中島町富田菊測方から）には、

婦朝 日射病ノ為め未だ静養中 蓬萊島の月はとても見きらんと杭州で覚悟した 幸乎不幸乎婦朝した 旅行はイヤニなる程歩きたをした 秋風が吹けは弥々上京又御教訓に預る宜敷 何か燕巢舎御心当ありますか 御報願上候

とある。病気は日射病で、「幸乎不幸乎婦朝した」という報告、「秋風が吹けは弥々上京……何か燕巢舎（注・溪仙の住む所）御心当ありますか 御報願上候」と、帰洛後の落ち着き先を相談している。ということは、前年に妻帯し転居

した「鴨川仁王門」の借間は渡台前に引き払っていたことになる。その間、溪仙の妻は実家にでも戻っていたのだろう。九月二日、博多を発ち上洛。一〇月一四日付の書簡（仏光寺町東入北側聚光寺から持参）に、

拜啓 種々御邪魔ノ段深謝致し候 御願ひ致し置候敷金とか申すもの御都合願上候 外に少々願うれば幸甚勿論多きは望まず候 使者に御事積被下は幸甚候 尚家具は何れも不足なれば却而不自由も感じ申さす候 古仏ノ倉庫でものし付ときては御辞退申さす候 支那土産未だ開かず候得共已れ大切ノ貴重ノもの福州より携へ来るもの別紙不取敢呈上致候 御尊父閣下へも後日差上候もの何れ御持参可致候 先は御願迄 富田溪仙

内貴舟屋様 御連絡被下待候

とある。溪仙の書簡では唯一の借金の申し込みで、用立てを御願ひしていた敷金に少しばかりプラスして使いの者にお渡し下さいと頼み、内貴の世話と思われる「仏光寺町東入北側聚光寺」の一室に、「古仏ノ倉庫でものし付ときては御辞退申さす候」と入居している。この書簡から、上洛時の溪仙はまさに素寒貧の状態だったことがわかる。

帰洛後、溪仙は多忙を極める。

帰国早々の第三回文展出品画の制作（結果は落選）、台清・南清行に取材した墨画の画帖「支那山海経」の制作（不

出品)、「相思樹の橋」(明治四三年の新古美術品展入選。「春郊牧童」と題されていた作品がこれに該当する)の制作、翌年は台湾・南清行でのスケッチを基にした墨画の小画帖『台清漫画紀行』(コロタイプ版)を便利堂から刊行、第四回文展出品画の制作(落選)。何よりも多忙だったのは、帰洛早々に内貴の肝いりで組織した「溪仙画会」の注文画の制作で、これは翌々年の三月までかかっている(拙稿参照)^⑦。

台湾・南清行は満足のいくものではなかった。しかし結果的には、帰朝報告のつもりで刊行した『台清漫画紀行』が思わぬ成果となった。当時、絶頂期の俳人河東碧梧桐がこの粗画の小画帖を絶讃したことから、無名の溪仙は一躍俳人たちに知られる存在となったのである。これが縁で溪仙は碧梧桐の知遇を得、碧派の俳人との親密な交遊が始まり、明治四四年の東北・北海道・北陸行へと発展する(拙稿参照)^⑧。

(六) 北陸行

明治四四年(一九一)四月、溪仙は東北・北海道行に出る。五月下旬に一旦帰洛し、六月下旬に越中高岡の俳人筏井竹の門を訪ねる。以降、九月下旬まで北陸の俳人たちと交遊、その間に立山、白山に登山、佐渡を巡り、岐阜の俳人塩谷鶴平を訪ねて、帰洛したのは十月上旬である。

城端からの書簡（野村満花城方から七月六日付）を、次に紹介しておこう。

高岡を二日に出発して十里西南に当る城端と云ふ高地に巢を転し候 今同地ノ友人ノ所にて山泉風物に接し或ハ揮毫すると云ふ風ニテ取とめもなく滞在致し候 目的は立山の山開きを越中に待つ居候次第二候 本月十七日迄城端二籠城候 十八日再高岡の竹の門君ノ所へ転する予定ニ御座候 同地俳人五十余名ノ歓迎を受け溪仙てふ□□も名を知らぬものなき盛大に候 そこで従来ノ陳腐極まる凡画を落城せしめ燕巢ノ覇氣を振ふと云ふ風に相成居候

大雅も汽車なき時に此地及び能登地ニ入りし由 山陽も然りと聞き及び候 敢て古人ノ模倣をするにあらずと雖も我に此の機あるを幸と存し候

能登一周ハ本月末に候 白山立山ハ二十日過ぎと存し候 飛驒山中越後の山泉をも跋涉する予定に北越通に相成へく考に御座候……兄ノ御動静如何御座候哉 御身体御隙も有之候哉御伺申上候 若し小生滞在中越中方面避暑ある様なれハ是非御立寄奉待候 先ハ不取敢近況御報まで 溪

舟屋様



「従来ノ陳腐極まる凡画を落城せしめ燕巢（注・溪仙のこと）ノ覇氣を振ふと云ふ風

に相成居候」とある。これは溪仙の自嘲とも受けとれる。「富田の絵は調子で描く絵だから、いつも同じ様には行かぬ。作毎に非常にむらがある。……遺作展などやるにしても餘ッ程吟味せんと、却つて故人を恥かしめる様な事にならぬとも限らぬ」^⑨と内貴は語っている。溪仙は画会の注文画や旅先での席画を多数こなし、それは画家の弱点にもなることを、溪仙自身も自覚していたに違いない。

溪仙は模索時代に何度か画会を行っている。台湾・南清行から素寒貧で帰洛した溪仙が、およそ二年半後の明治四五年（一九一二）二月、「京都油小路中立売下ル」の地に瀟洒な一軒家を構えることができたのは、画会と旅先での席画による収入によってだが、それを可能にしたのは、画会の發起人を引き受けた内貴の尽力と、碧梧桐が『台清漫画紀行』を絶讃したことから始まった俳人たちとの親交と支援があったからである。

（七）「山海経」と「若菜摘」

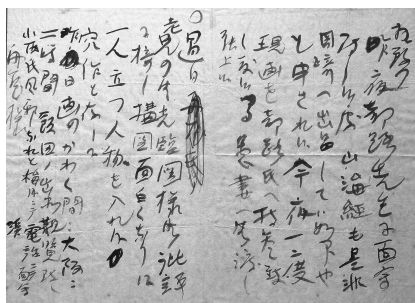
帰洛したのは一〇月上旬である。

ということは、文展入選は年来の悲願だったにもかかわらず、この年の文展に出品する意思はなかったことになる。東北・北海道・北陸行でのスケッチを基にした墨画の画帖『山海経』の刊行を優先したからである（拙稿参照）^⑦。『台清漫画紀行』が俳人の間で好評だったことから、その国内版として『山海経』を刊行する計画は、すでにこの旅

に出る前から念頭にあったと考えられる。およそ四ヶ月におよぶ北陸行は、俳人を主とする新たな支援者を得る機会になり、また北陸の地に溪仙流の俳画を芽吹かせることにもなったという（注・俳人筏井竹の門の俳画）。俳人との親交はその後も続き、そうした背景から俳句の季題から発想した「若菜摘」という作品が生まれることになる。

拝啓 昨夜都路先生に面会致し候処 山海経も是非岡崎へ出品してハ如何也と申され候 今夜一度現画を都路氏へ持参致し度候間愚妻へ御渡し願上候

過日 老兄の御光臨図様御批評に接し構図面白くなり候 一人立つ人物を入れ候 穴作と存し候……



この内貴あて書状は、溪仙の妻に持参させたもの。うつかりすると見落とすかも知れない。封筒の日付（三月二三日）に着目すると、その内容は看過できない。

前半は、昨夜師匠の都路華香から「山海経」も岡崎（注・京都の第一勧業館で四月一日から開催される第七回新古美術品展）へ出品してみてもどうかと勧められたので、一度原画を都路氏に見せるため持参したので妻にお渡し願いたいという内容。

封筒の日付は三月二三日だが、「山海経」出品云々とあるので、明治四五年と判断できる。原画を内貴清兵衛に預けていたのは、『山海経』を便利堂からコロタイプ版で刊

行するためで、その打ち合わせのために前年一二月、便利堂の主人と技術者が内貴を訪問、その後に溪仙宅を訪問したという書簡（内貴清兵衛あて 明治四四年一二月四日付）が残っている。

「山海経」はもともと第一七回新古美術品展に出品するつもりはなかったが、都路華香の勧めで急遽出品することになったという経緯は、未知の事実であり重要である。

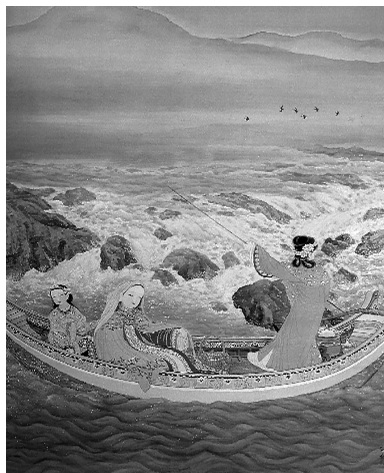
後半は、過日、内貴が溪仙宅を訪れた折りに制作中の作品を批評した結果、構図が面白くなったという報告。

「制作中の作品」とは、同じ書面に書かれているので当然第一七回新古美術品展へ出品予定の「若菜摘」と判断できる。溪仙の基本画集である『溪仙遺墨集』および『溪山人遺作集』の年譜には、第一七回新古美術品展の入選作として「山海経」は記載されているが「若菜摘」は記載されていない（両年譜には多くの不備がある）。「若菜摘」が同展の入選作と再確認されたのは近年であり、この作品は長いあいだ疑問作と見られていた（拙稿参照）^①。「若菜摘」という画題と作品の図様が普通の理解では結びつかない点もその一つ。「若菜摘」は俳句の季語で、「海草類の採取も、『磯菜摘む』として、『若菜』のうちに数えられていた」（『日本大歳時記』講談社版）という解釈から、この絵の着想が生まれたと考えられる。

文中の「一人立つ人物を入候」というのは、磯で海草を採る小舟上の三人の女性の、右端の竿を持って立つ女性を描き入れたことで、この構図の変更によって作品が「穴作」（傑作？）になったということだろうか。

このように、内貴清兵衛が制作中の溪仙に遠慮なく口出しすることはしばあったようだ。内貴の回想談には、「伎芸天」（明治三十九年清水寺蔵）と出世作「鵜船」（大正元年）の事例が出てくる（拙稿参照）¹²。パトロンを自負する内貴清兵衛との議論から、新たな発想が生れることもあったのは確かだろう。

さらに「山海経」は、次のような展開の発端になった点でも重要である。



もともと出品の考えがなかった墨画の小画帖「山海経」が、ごく平凡な賞にすぎないにしても四等賞を得たことに意義があった。本画つまり展覧会に出品する目的で本格的に取り組む絵画は当時も着色画が主流であり、溪仙の常識からすれば、着色画よりも墨画の方が比較的評価されたことは意外だったに違いない。そのことが、墨画を本画として見直すきっかけになったのではないかと思われる。

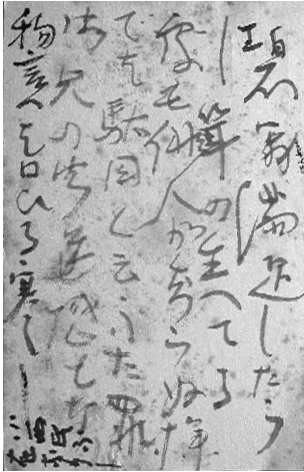
溪仙は翌年の文展から着色画に加えて墨画も出品する。着色画は落選、墨画の方は「鵜船」（文展初入選）に続いて「沈竈・容膝」（大正二年）が連続入選する。本来は着色画の画家である溪仙が、新南画と評されたこの二作によって、墨画の画家として画壇に登場した（着色画が注目されるようになるのは「沖繩三題」（大正五年）あたりからだ

ろう)。文展に現れたこの新人は、審査委員だった横山大観の記憶に残り、後に再興院展に参加する機縁にもなったのである。

都路華香が「山海経」の出品を勧めなかったならば、本画としての墨画の系譜は生まれなかったかも知れないし、溪仙は異なる路線を歩んだ可能性も考えられるだろう。

(八) 内貴清兵衛と河東碧梧桐

内貴に碧梧桐を紹介したのは溪仙である。



新出の富田溪仙書簡（古川）

内貴あての葉書（明治四四年一〇月六日付）に、「兄の嫌らいな新傾向」とあるので、内貴は碧梧桐の新傾向俳句を嫌っていたようだ。北陸から帰洛直後、溪仙は内貴に誘われて碧梧桐を伴い洛北に茸狩りに行く（野村満花城あて葉書 同月一日付）。その後の内貴あて葉書（同月一三日消印）に、「碧翁満足したらし茸の生へてる処モ仙人が知らぬ様では駄目と云ふた罪 御兄の御遺憾となり 物言へは口ひる寒し」とある。内貴が「茸の生へてる処モ仙人が知らぬ様では駄目」と碧梧桐を揶揄したので、碧梧桐が機嫌を害した

という。

碧梧桐から写真代三円を内貴に渡してくれと頼まれ、持参させた（大正元年八月八日付）が内貴が受けとらなかったのか、数日後、碧梧桐は内貴へ「此度は又さうるさき御厄介恐縮千万 同封ハホンの寸志御叱留被下度候 大正元年八月十二日 東京根岸 碧」と、葉書を送っている。碧梧桐は内貴清兵衛が苦手だったようだ。

（九）内貴父子の確執

溪仙書簡の中には、内貴家の人々との関わりを窺わせるものが少なくない。内貴の弟富三郎には多数の書簡を出している。これを読むと溪仙は、「杜参」と号した俳人で写真にも趣味を持つ富三郎を弟のように見ている。また、内貴父子の確執を知りながら父親の甚三郎には十分な敬意をはらっている。甚三郎からの新亭への誘いや贈り物に対して、溪仙が自作の小品を贈ったりもしているので、内貴家の人々とは至極円満な関係だったことが推察される。

しかし、内貴家には深刻な問題があった。明治三六年に先代が没した後、京都市長を退いた甚三郎が銭清に戻ってから銭清の経営権をめぐる父子の確執が生じていたのである。さらに問題が複雑になった。内貴清兵衛の一三歳下の弟富三郎は明治四五年から兵役を務めていたが（都路華香から内貴富三郎あて葉書 同年一月一〇日付）、大正三年三月には除隊する予定（溪仙から富三郎あて葉書 同年二月二日消印）であり、父としてはその後の身の振り方を早急

に考えてやらねばならず、内貴父子の確執は深まったようだ。

大正二年（一九一三）の、次の二つの書簡はその問題が表面化したものだろう。

使者を以て御相談とやらのこと　まさか臨終でもなかと差ひかへ候

……早合点かも知れず候も御臨終でない限りには人間に是より大なる問題はなかと存し候　氣の向き次第御邪魔可致候　若しも臨終ならば小生行くまで死なずに待つて貰らひ度存し居候　氣随多罪……溪

舟屋様　寧丸下

（大正二年一月一四日付）

拝啓　御無事なりや御尋ね申上候　永々長々の御顔をも拝觀致さず一ツは来客多々の為一ツは店のコチャ／＼の由眼廻致し申し候事と推察イ、カゲンで断^レ英を見せては如何　茲が十八番の兄の『何れ死ぬのじや』でないかと思ふ執着には執着が重なるもので遂に執迷となる　氣の弱い事云わずに英断／＼　それより洋服でもキシメシテおい^らんでも買いにい（つ）　た方が兄には悟りの道が早い　高僧溪

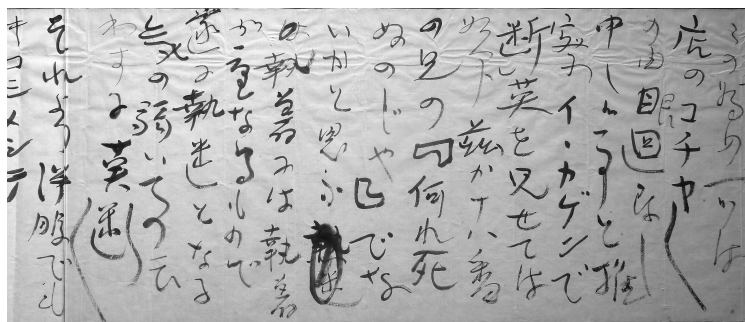
舟屋兄

（大正二年二月一日付）

二つの書簡を読むと、内貴と溪仙の立場が逆転しているかに見える。「使者を以て御相談」とは何か。後の書簡から
新出の富田溪仙書簡（古川）

ら「店のコチャ／＼」は、つまり錢清の経営をめぐる内貴父子の確執についての相談と考えられる。

「高僧溪」が内貴に忠告している。「長々の御顔」とは内貴の顔が長かったから。「店のコチャ／＼の由眼廻致し申し候事と推察イ、カゲンで断英を見せでは如何」、「何れ死ぬのじや」といつもあなたは言ってるじゃないか。父甚三郎との確執にそろそろ決着をつけてはどうかと忠告、「おいら。んでも買いにいった方が兄には悟りの道が早い」と、葛藤に苦しむ内貴を茶化しながらも内貴家の内紛に氣遣いを示している。「何れ死ぬのじや」が、何事にも合理的な判断を下した内貴清兵衛の決めぜりふだったとはおもしろい。前の書簡の宛名脇付には「錦禪下」、後脇付では「宰丸下」と書き、後の書簡には「高僧溪」、以後の書簡にも「先生より」「崇鼻下」と書いたりもしている。二人には相通じる一種の激励の意味にも受けとれる。



白崎秀雄『北大路魯山人』（中公文庫 一九九七年）には、「次男富三郎の家を『錢清』の前に建て、清兵衛に財産の分与を迫る。清兵衛は断り、父子の争いは深まった。清兵衛は、足を踏み入れたことがない祇園に、通い始めた。好きな古美術にも、ひとしを親しむようになった。

彼は、やがて生まれ落ちてよりあれほど深く結ばれて来た『錢清』を去って行く。彼はその際、妻子をそのまま残し、富三郎を月給制の支配人として、財産上の実権だけは、自ら堅持して放さなかった」（上巻二二五頁）とある。

内貴清兵衛が錢清を去って、松ヶ崎の別荘に居住するのは大正五年（一九一六）頃と考えられるが、これについては後述する。

大橋家の溪仙書簡が大正四年までしかないのもこれと関連して説明がつくだろう。つまり、内貴は錢清あての溪仙関係の書簡もそっくり残して錢清を去った。内貴の妻ナオ、あるいは錢清の支配人となった弟の富三郎がそれをそのまま、保管したということ。大橋家の溪仙書簡の中に内貴清兵衛あて以外に、富三郎その他の書簡も含まれているのはその故だろう。以後の内貴清兵衛あて書簡は、当然、松ヶ崎別荘の方に出されたと思われるが、その所在は不明である。

（一〇）再興院展参加の背景

溪仙と横山大観との初対面は、大観が日本美術院を再興するため、京都の有望な画家を勧誘する目的で上洛した大正三年（一九一四）九月中旬頃である。

大観の勧誘に応諾して、京都から第一回再興院展に院友として出品したのは溪仙だけで、他の画家たちは、文展の重鎮である竹内栖鳳を頂点とする京都画壇の師弟関係に配慮して、従来どおり文展に絞り再興院展には出品しなかつ

た。

独立して師弟関係が自由だった溪仙は、再興院展と同時期に開催された文展にも作品を三点応募したが文展は落選、「希望して居た美術院は昨日三越店員の友人から電報で入選好評とある エライコト／＼」（大正三年一〇月一五日消印 葉書）と、内貴に報告している。

「入選好評」とは、無鑑査ではなかったということ。これは新事実である。大観以外には面識がない溪仙を、日本美術院の同人たちに紹介する意味があったからだろう。

その直後の絵葉書には、「我輩が出る会に出た絵画は尽くよく見へる 最初から我輩は人にこう言ふのであります 通つた方に味方する はねた方の会はぼろ糞に言ふと宣言す」（大正三年一〇月一八日消印）と、複雑な心境を内貴に伝えている。

再興院展の入選を喜んではいるが、他の画家たち同様に文展を最重視していたのは間違いない。その反動から、文展に落選した京都の画家たちと反文展の新団体の結成を企てたと内貴は証言している。これとは別に、以前から文展に不満を持っていた京都画壇の俊英土田麦僊も、文展に対抗する新団体の構想を溪仙に持ちかけていた。

そういった複雑な京都画壇の渦中にいた溪仙が、結局一年後の文展には出品せず、第二回再興院展に「宇治川之巻」出品して、会期中に日本美術院の同人に推挙されている。その間に何があったのか。

大観が、関西に日本美術院の拠点をつくるためには、第一回再興院展に京都からただ一人出品した溪仙と、その後

ろ楯である内貴清兵衛がキーパーソンだと考えたのは想像に難くない。

内貴は「横山さんが富田を院に引ッ張りに来た。……富田君を院に貰ひ度いが承知してくれと云ふ事だったので、今の反文展の団体の事などもあり到底富田は文展の男ではないと思つてたので私は早速大賛成した」という。¹³⁾

大観の内貴清兵衛訪問の目的は、溪仙を日本美術院の同人に迎えることの了承と、内貴には日本美術院の賛助員を要請するためだった。この訪問の時点で、すでに溪仙の再興院展参加（日本美術院の同人になること）は事実上約束されたと思つてよいだろう。つまり、溪仙の念頭から文展も反文展も消滅し、再興院展へと舵を切ったということである。

以上のことを前提にしなければ、大正四年（一九一五）五月一八日消印の溪仙あて大観書簡は理解し難い。

その書簡には、再興院展第二回展の会場探しや日本美術院の苦しい経営事情などが率直に打ち明けられている。関西展は大阪が困難ならば今年だけ京都開催でもよいとし、「京都の方ハ先日の話にて、当方ニ費用ヲ要せざるのみならず、都合によりてハ、何分の後援もあるよふな話振りに承知いたし居候」と、大観上洛の折りに提案された京都開催の条件について再度確認している。

次の内貴あて溪仙書簡二通も同様である。溪仙の再興院展参加と内貴の日本美術院賛助員を前提にした書簡である。

拝啓 明朝 高嶋屋倉上君より例の東海道五十三次の長巻貴家へ持参致さる、由都合ニテ小生も拝見致し（二三見ぬ分もあり）度旁々御伺ひ致し度候 予め御案内申上置候 勿々

五月廿五日 富田溪仙

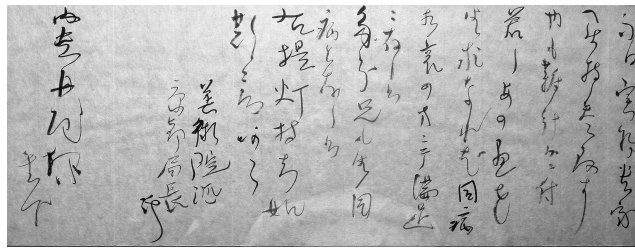
内貴清兵衛 様

（大正四年五月二十五日付 持参）

この書簡は、高嶋屋からの溪仙あて手紙を添えて、「東海道五十三次絵巻」を内貴清兵衛に見せに行く旨の連絡である。

大正四年三月、横山大観、下村観山、今村紫紅、小杉未醒の四人が東京から汽車を用いず、人力車、馬車、駕籠などで旅をして、京都までの道中を描いたのが、この絵巻である。制作の目的は、再興した日本美術院の宣伝を兼ねた資金づくりのためであり、作品の売買に関与したのは第一回再興院展の大阪展を大阪心斎橋高嶋屋で開催した高嶋屋である。結局、この作品は横浜の原三溪に渡り、現在は東京国立博物館の所蔵になっている。日本美術院とその賛助員である内貴清兵衛、高嶋屋、その間を仲介する溪仙の関係を示した書簡である。

拝啓 御無沙汰致し居候 先日大阪高嶋屋百富士会を一覧致し候処 横山大観氏ノ富士川の不二群をぬき候 宗達
の気分あり他の天香具山の富士ハ陳腐な様□□なれど俗衆に受ける様二候も識者ハ富士川をほめ居候 それ二付け小



生も賛した一人でありますので只今ぬかりなく田中信吉氏より別紙の書面参り居候ニ付不日
実物貴家へ御持参致すやも難計候ニ付若しあの画を御求なれば同病相哀の方ニテ満足ニ存し
候 多分兄も御同病と存し候

右提灯持ち如斯二候 呵々

美術院派 京都局長 溪

内貴舟屋様 貴下

(大正四年六月二五日付)

「横山大観氏ノ富士川の不二群をぬき候 宗達の気分あり」と、大観の絵を称讃し、内貴
に購入を勧める溪仙は、「提灯持ち」を自認、「美術院派 京都局長」とすでに名乗っている。
関西での第二回再興院展の開催地が京都に決まったのは七月中旬頃で、言うまでもなく溪仙
および内貴の尽力があつたからに他ならない（以後、京都展は恒例となる）。

大正四年の第二回再興院展に合わせて、溪仙は夫人同伴で上京する。この旅行を「旧婚自
由旅行と命名」、再興院展と文展とを比較して「我田引水ニあらねと美術院は文展ニ対し豊かなる思想がみなきり居
候 米相場の市より出て山野を歩するの感有之候」（同年一〇月一七日付）と内貴に報告している。会期中、同人に
推挙され、正式に日本美術院の同人に迎えられた。以後、溪仙は再興院展京都展の責任者として、その都度上洛する

横山大観と親交を深め、強い絆で結ばれることになる。

一方で、溪仙の再興院展参加は、それまでの交遊関係に変化をもたらすことになる。

碧梧桐との関係がそれで、碧梧桐は芸術上の同志と信じていた溪仙が、大観の軍門に降ったことに対する不満から、大観が溪仙を重視したのは「純なる芸術的共鳴よりも、他の複雑なる社会的意味に於て、ある」と、大観を痛烈に批判する一文を雑誌に発表し、それを読んでほしい旨の葉書（大正五年七月二日付）を溪仙に送っている（拙稿参照^⑭）。

また内貴清兵衛は、「明治卅六年から大正四年、富田が院の同人になる迄丁度十二年間、何彼と私は富田の面倒を見た積もりだ。もう是れで一人前になつたし、売れる様になつた絵をほしがつてゐる様に見えるのも癪だから、其後富田は突ッ離してしまつて、富田を拾つて貰つたお礼に今度は速水（御舟）の世話を引受ける事にした^⑮」と語っている（別の回想談には、「出世作『鵜船』を描いた明治四十五年、三十五歳迄だから恰度十年間のことだ^⑯」とある）。

再興院展参加は、溪仙にとって最善の選択だったことは間違いない。だが、それによつて碧梧桐との交遊は疎遠になり、内貴清兵衛は溪仙のパトロンの立場から潔く身を引くことになったのである。

(一一) 内貴清兵衛の松ヶ崎別荘

大正四年一二月四日付の内貴あての書簡に、「過日は東京の諸員一時ニ襲来致し万々御礼申上候 昨日不在中ニテ 欠礼致し候……」とある。

第二回再興院展京都展の開催中に、日本美術院の関係者が御池の錢清に内貴清兵衛を訪ねたことに對する礼状である。京都展は恒例となるので、このように大勢が一度に内貴を訪ねることは予想されることであり、日本美術院の賛助員として、それに応える応接室が必要になったのは想像できる。

溪仙の再興院展参加を境に、内貴と溪仙との交遊が途絶えたわけではなかった。

大正六年(一九一七)十一月一〇日付の京都の新聞(⑩)に、新聞記者と溪仙が「松ヶ崎大黒天を右手に望む瀟洒な内貴別邸」を訪ねる記事がある。京都の美術界のパトロンとして知られるようになった内貴清兵衛の松ヶ崎別荘には多くの美術家とその関係者が訪ねている。その別荘の内部の様子は全く知られていないので、少し長いが引用しておきたい。

富田溪仙君と記者を載せた自動車は、松ヶ崎大黒天を右手に望む瀟洒な内貴別邸の門前に横付けに停まつた。可なり着古した不斷着に萌黄の前垂掛けの主人公は折柄客を送つて玄関に其姿を現したが、私達を見ると直ぐ「何卒洋館

の方へ」と云ふ。勝手を知り抜いてゐる溪仙君は早速裏の方へ先に立つて案内する。通された洋館の一室には、一人の若い髭男が、如何にも呑気さうに椅子に凭れて平然と私達の方を眺めたが溪仙君と会釈を取り換はした。細面の顔に頭痛膏を顚顚こめかみの下に貼つてゐる主人の清兵衛さんは、記者と初対面の挨拶もそこさな／＼に宛然旧知にでも邂逅めぐりあつた様な調子で京都弁に洒落など交へながら真中の大きな卓子を囲んで話し合ふ。最初私の眼を射たのは、壁上の無数の油絵である。安井曾太郎、梅原龍三郎などの新しい所から、満谷国四郎、小杉未醒、吉田博など、其外殆ど我邦洋画界の各画派を集めたと言つても差閥さつゐへのない程沢山な洋画がかゝつてゐる。又正面の壁には掛物が三幅其中に溪仙君のもあつた。「どうも矢張洋館には油絵でなくつちや収まらん」と溪仙君が口を出すと、主人は「此室も実は誰か洋画家に住ましてやらうと思つてゐるのやが、京都には碌な油絵描がゐよらん、一寸優ましな奴は東京へ行きくさるし」と氣焰を揚げて「此洋館は去年作しらへたのやが、氣に入らん様になつたら、何時でもぶち壊して建て直す迄や」と、寵児の氣隨さを曝け出す。壁上の油絵が清新な色調を漂はしてゐる此室の一方には、大小無數の仏像が入口の壁二面、大きな戸棚一杯に座を占めて蒼古の色を競つてゐた。

「仏像は大分以前から集めてゐるのですが近頃は頓と掘出物がなうて……」と云ふと佛好きの溪仙君は「此家にあるのより僕の所が大分上等だ」と揶揄氣味で云ふ、主人は「此奴は悪い奴ぢや、よい掘出物があつても、何時も僕には黙つてゐて、さて自分のものにでもなると、大騒ぎに騒ぎ立てよる、真実に悪い奴ぢや」「夫れでも富豪に金で面を張られて買取られるのは、口惜いからな、めつたに此所へは知らされん」と画家は却々敗けてゐない。……

「併し仏像許りは何うも金づくでは購へぬ、これはどうしても縁のものや、縁がなけりや集まらん。富田君処にあるのはあの毘沙門と女神がまあ一等かなあ、あの毘沙門を奈良で掘出した時の騒ぎと云つたら大変なものでしたよ、何でもあれを担いで、一等車に乗込んだのやからなあ、……」「これは近頃の掘出物やと思つてゐるのですが」と道成寺縁起の絵巻二巻を取出して見せる、……主人は又同じ入札で手に入れた大雅堂の横幅の山水を壁へ掛ける。其横手の硝子戸棚の中には泉倉や其他種々の人形が一杯入いつてゐた。……

(名流の趣味41「松が崎別邸での無駄話 内貴清兵衛氏談」)

上記の記事中に、「此洋館は去年作らへた」とあるので、松ヶ崎別荘の洋館は大正五年に建てられたことが判明する。内貴清兵衛が銭清から松ヶ崎へ移つたのはその頃だろう。その一室には、内貴のコレクションが納められ、壁面には「安井曾太郎、梅原龍三郎などの新しい所から、満谷国四郎、小杉未醒、吉田博など、其外殆ど我邦洋画界の各画派を集めたと云つても差^さ間^まへのない程沢山な洋画がかかつてゐる 又正面の壁には掛物が三幅其中に溪仙君のもあつた」。

溪仙に日本の伝統絵画を云々した内貴清兵衛のコレクションの中に、近代日本の油絵が多数含まれているのは意外でもある。

この洋館は、美術家のパトロンとして、また古美術のコレクターとして知られるようになった内貴清兵衛の、いわ

ば自己表現の場として以後活用されることになる。古美術商や土田麦僊らの国画創作協会を結成した画家たちとの応対も、この洋館で行われたのだろう。

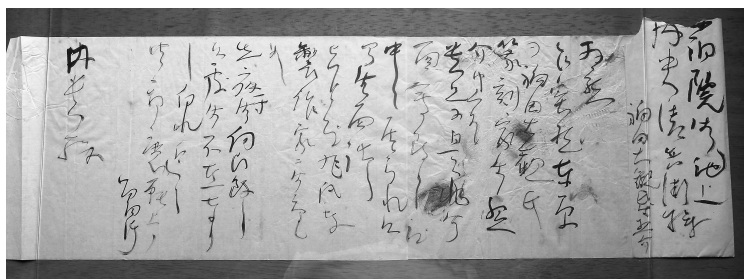
（一二）福田大観（後の北大路魯山人）紹介状

「北大路魯山人伝」には、内貴清兵衛は魯山人（本名は房次郎、大観、魯卿、魯山人と号す）の芸術家としての大成になくはならない恩人として書かれている。

溪仙と魯山人との関係も散見される。二人の出会いについて、吉田耕三編「北大路魯山人年譜」（朝日新聞社主催『北大路魯山人展』図録一九九六年）に、このようにある。

大正二年……房次郎（後の北大路魯山人）も柴田家で未だ会ったことのない京都の富田溪仙が描いた日本画の素晴らしさに驚嘆、溪仙の雅号『燕巢楼』の濡額を彫って送りつけたことから、溪仙も大観の才能に感じ入り、自分が世話になっている京都の豪商で美術好きの内貴清兵衛へ房次郎を引き会わす手引きをしてくれた。

また、山田和編年譜（山田和『知られざる魯山人』文春文庫 二〇一一年）には、吉田耕三の「北大路魯山人伝」



を根拠にしているが、「大正二年四月、数奇者の内貴清兵衛や若い富田溪仙と出会う」とある。

次の書簡（年月不明 持参）は、溪仙が福田大観（後の北大路魯山人）を内貴清兵衛に紹介する書状である。表書には「東洞院御池上 内貴清兵衛様 福田大観氏御紹介」とある。

拝啓

乍突然東京の福田大観氏篆刻家御紹介申上候 貴兄に是非御面会致し度申し居られ候間御面談被下度非凡な製作家ニ御座候 先夜一寸御伺ひ致し候処御不在なりし 何れ近々御邪魔願上候 富田溪

内貴様

福田大観が持参した溪仙の紹介状では年月は不明だが、上記の引用文から大正二年四月九日と判断される。「非凡な篆刻家」と紹介された福田大観は、その後、希望どおり内貴清兵衛の知遇を得て、内貴家へ出入りするようになる。

「俺が内貴さんの世話になったのは、三十一の年から十年間だけだ」と、後年、魯山人は側近者に語ったという（前記『白崎本』上巻三〇七頁）。つまり魯山人が内貴の下で美意識や料理に関することを学んだのは、大正二年から大正一一年（一九二二）頃までということになる。

内貴と魯山人との関係はどの「魯山人伝」にも詳しく書かれているが、内貴あてに紹介状を書いた溪仙と福田大観との関係についてはあまり調査がなされていないようである。

最新の魯山人伝である前記の山田和『知られざる魯山人』には、「房次郎は泰産寺の独身時代、ここに富田溪仙を呼び寄せて共同生活している。……溪仙との生活がどれだけ続いたかはわからない」（二二五頁～二二六頁）、さらに巻末年譜にも「大正三年 清水寺内の泰産寺に富田溪仙と住み、……」と記述されている。これは誤記だろう。

すでに述べたが、溪仙は明治四五年に「油小路中立売下ル」の地に瀟洒な一軒家を建て、妻帯もしている。当時は文展入選の画家として京都画壇で注目され始めた頃である。大正三年は文展の他に横山大観に誘われて再興院展にも出品するという状況であり、文展落選後は文展に対抗する新団体の結成を企てたりもしている。この時期に、売り出し中の篆刻家とはいえ、三歳年下の福田大観が「富田溪仙を呼び寄せて共同生活」といったことは考えられない。また溪仙が清水寺において「伎芸天」と「訶利帝母」を制作したのは事実だが、前者は明治三九年（一九〇六）、後者は明治四一年（一九〇八）の作品だから、福田大観とは全く面識もない頃の話である。

溪仙、内貴清兵衛、福田大観、この三者に関する資料を次に上げておきたい。

其後御無沙汰仕候 生活如何工合に候哉 御伺ひ申上候 大観氏永観堂紹介ノ件承知仕候 過日ハ御手紙多謝、
近々御拝眉万々 十月十一日 溪

舟屋様

(内貴清兵衛あて 大正三年一〇月二一日付)

文中の「大観氏」は、横山大観を指すのか福田大観のことか紛らわしいが、この書簡の日付が第一回再興院展の開催日前なので、これは福田大観と判断して良い(この時点では、内貴と横山大観との交遊はまだないし、内貴経由で横山大観が溪仙に何かを依頼することはないだろう)。

「大観氏永観堂紹介ノ件承知仕候」とは、内貴から福田大観を京都の永観堂へ紹介することを頼まれ、承知したという返事である。永観堂の和尚は、溪仙の明治四一年の内貴あて年賀状(注・大橋家所蔵の一番古い溪仙書簡)に描かれた一〇人の似顔絵の中にあるので、溪仙旧知の人物と知れる。

次に、内貴が福田大観について記した溪仙あての葉書(大正四年四月二九日付)が残っている(筆者が確認できる内貴の溪仙あて書簡)。

写真を趣味とする内貴が、京都の神護寺で撮影した仏像の写真(薬師如来立像、五大虚空蔵菩薩坐像、金剛虚空蔵

菩薩坐像、阿弥陀如来坐像」の葉書四枚を同じ日付で溪仙に送った中の二枚に、「神護寺薬師如来撮影……福田大観君六朝佛掘出す」「六朝佛漸く当方へ安置奉る」とある。福田大観が六朝仏を見出し、仏像収集に熱心な内貴がそれを入手したことを知らせる内容である。この葉書から、福田大観が内貴清兵衛の懷に深く入り込んでいる様子が推察されるだろう。

さらに、大正五年の再興院展の会場で新聞記者が、魯卿（福田大観）と連れの紳士の会話を立ち聞きたという記事がある。

これは雅号を魯卿さんと云つて近頃青年画家の間に持て囃さる、新らしき篆刻家、中年の紳士と連だち来る 京都訛あり商売柄画はいゝ加減にして落款の印のみを漁り歩く……「これはどうや」と紳士、福田溪仙氏作「沖繩三題」の印を指す、「これは僕が彫つたのやがな、溪仙は豪い奴ぢやぜ、溪仙が嵯峨で初めて大観にお馳走になつた時貴方は草鞋穿きで深山を歩き廻つた事などありますかといつて大観を凹ました奴ぢや」

（「院展立聞き」『東京朝日新聞』大正五年九月一四日付）

溪仙の第三回再興院展出品作「沖繩三題」（四幅対）に押印された印章は自分（福田大観）が彫つたものであり、溪仙と横山大観との逸話も披露していることから察すると、この頃（大正五年）の福田大観は溪仙と交遊があり好感

を持っていたのではないかと思われる。

以上の断片から、筆者は溪仙と福田大観（魯山人）との交遊を想像するしかない。

「当時を見知っている人の話によると、溪仙とはあたかも番頭と丁稚程の違いが感ぜられたそうである」（吉田耕三「北大路魯山人伝（十一）」『陶説』九六号 昭和三十六年三月）というのが、本当に近いのかも知れない。

溪仙の死の直後、雑誌『星岡』（昭和十一年七月号）に「富田溪仙の死に就て」として、内貴清兵衛と魯山人との往復書簡が載せられた。この往復書簡の紹介は割愛するが、要するに、溪仙の急逝に思いを馳せ、内貴清兵衛が「吾藝術観の同志也」と認めていた御舟、麦僊、溪仙の相次ぐ死を悼んで魯山人に出した書簡に対して、魯山人の返書は、「あれ位の画人を勝れた画人のように 世間を思はず事は 却而害あるものとなす者に候」と反論、しかもその往復書簡を自らが関わる雑誌にわざわざ公表した。この反応の仕方は、美術家のパトロンを自負し、その成功体験を持つ内貴清兵衛の心情をひどく傷つけたことは想像に難くない。

「大正の末には、支配人にしてあった弟の富三郎が早世し、『銭清』は閉業状態になった」¹⁸（前記『白崎本』下巻六四頁）というから、陰りが見えはじめた内貴清兵衛に対する魯山人の侮りとみる見方もある（尤も、内貴は多くの不動産や株を所有する資産家に変わりなかったが）。筆者には、魯山人のより高い芸術志向を認めるにしても、一方

で、内貴清兵衛と溪仙との強い絆に対する、魯山人の積年の嫉妬心の現れと思われるかもしれない。

本稿では、福田大観を内貴清兵衛に紹介したのは溪仙である、という事実を再確認すれば足りる。その後の内貴清兵衛と魯山人との関係は、白崎秀雄の著書に詳しいので、そちらを参照されたい。

(追記)

かつて一流の書家^⑨が溪仙の書に注目したのは、その独学ゆえの書体の自由さかも知れない。溪仙の書簡の特徴は奔放な文体と筆跡にある。内貴清兵衛あて以外にも溪仙の書簡は多数現存しているが、忌憚のない本音が書かれている点では内貴清兵衛あてのものが一番面白い。何かの折りに、溪仙書簡も展観されることを期待したい（読みづらさはあるが）。

註

① 内貴清兵衛の回想談は、二つある。

a 「富田も死んだ」(談) 『塔影』一二卷八号 昭和二年八月号

b 「富田溪仙を語る よく喧嘩した頃」 『星岡』七一 昭和二年九月号

② 注①a参照

③ 注①b参照

④ 拙稿「溪仙の模索時代（三）——都路華香塾からの独立——」『福岡大学人文論叢』一六卷一号 昭和五九年六月

⑤ 拙稿「富田溪仙の台湾・南清行日誌（明治四十二年）」『福岡大学人文論叢』一四卷四号 昭和五八年三月

拙稿「溪仙の模索時代（五）——『台清漫画紀行』（画帖 明治四十三年刊）を中心に——」

『福岡大学総合研究所報』一三〇号 平成二年二月

⑥ 注①a参照

⑦ 拙稿「溪仙の模索時代（六）——『溪仙画会』（明治四十三年）と東北、北海道、北陸行（同四十四年）

『福岡大学人文論叢』二四卷三号 平成四年二月

⑧ 注⑦参照

⑨ 注①a参照

⑩ 注⑦参照

⑪ 拙稿「『春郊牧童』と『若菜摘』——溪仙の模索時代の異色作——」

『富田溪仙』展図録 茨城県近代美術館・福岡市美術館 平成二二年八月

⑫ 拙稿「溪仙の模索時代（四）——溪仙とパトロン・内貴清兵衛——」『福岡大学人文論叢』一七卷一号 昭和六〇年六月

拙稿「溪仙の新機軸——『鵜船』（大正元年作）を巡って——」『福岡大学人文論叢』三三卷三号 平成一三年二月

⑬ 注①a参照

⑭ 河東碧梧桐「横山大観氏に質す」『日本及日本人』第六八三号 大正五年七月号

拙稿「溪仙の再興院展参加を巡って——大観、麦僊、碧梧桐との関係——」『福岡大学人文論叢』三七卷一号 平成一七年六月

⑮ 注①a参照

⑯ 注①b参照

⑰ 『近代美術関係新聞記事資料集成 東京美術学校編』マイクログフィルム ゆまに書房 一九九一年

⑱ 『人事興信録』（昭和二二年版）には、内貴清兵衛は絹織物卸商、屋号は「錢屋」、弟富三郎は存命（同一八年版では亡弟富三郎）とある。また、『京都織物界紳士録』（昭和一一年版）には、「営業方面は名支配人広畑氏担当堅実なる経営」とある。

⑲ 後に文化勲章を受章する青山杉雨は、『近代書道グラフ NO 9』（近代書道研究所 一九六三年）で「特集―富田溪仙の書蹟」を編集している。

参考 拙稿「溪仙の模索時代」年譜（一九〇二年―一九二二年）『福岡大学総合研究所報』一八八号 平成八年一〇月

※文献等には「富田」と「富田」が併用されているが、この論考では「富田」に統一した。